

どろ水と石わらの中から 再建に立ち上る宇治市

だが復興は容易でない

災害の中に立つ

市長 山崎平次

この度は台風の襲来によりまして、淀川の決壊という思はぬ大事がおこり市は未曽有の水害をこうむり幾十年辛苦の美田を水没にまかすは勿論、家屋、家財の流失、破壊もおびたしく、且笠取方面の山地における災禍の惨状も目をおおる有様であります。市民の皆さんに、とり分け直接水魔の災害をうけられた市民の皆さんに、心から御同情を申し上げます。

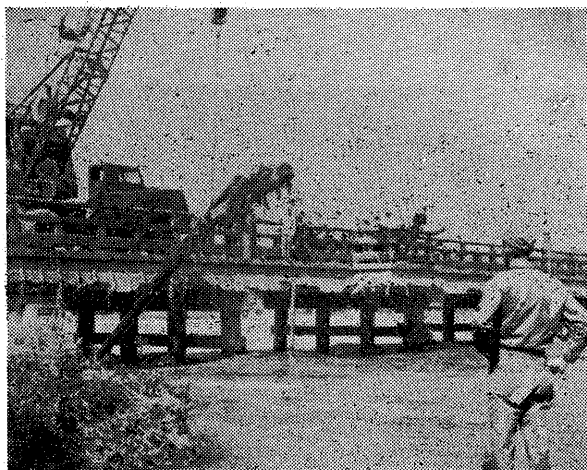
御承知の通り、災害援助法の発動を見ましてから、應急の措置が構えられますと、市も又市会にはかりまして、災害対策費の要求等、復旧の基本策を立て、厚生治産の方途を進めて参りましたが、何にしろ、被害の大きさと地区の廣さは、その救助に困難を加えつゝあるのであります。

だが、何と申しまして、この天災にうち勝ち、泥水の中から立ち上り、瓦礫の中から復興の礎石を見つけねばなりません。その礎石こそ、あなた方の一番身近な手の中に握られている事を忘れてはなりません。

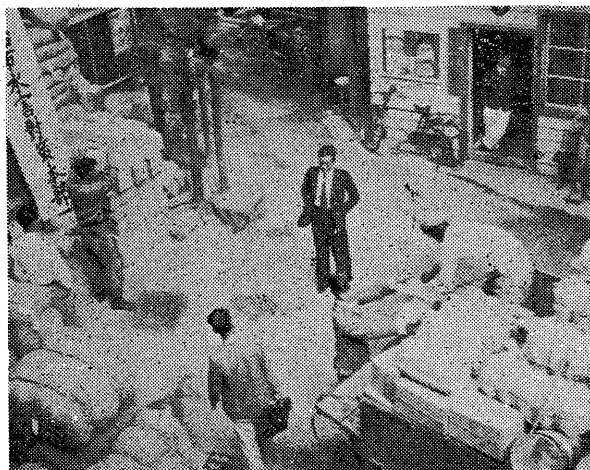
ひとときの災害でしたけれども、復興には長い時を要します。よし苦しくとも、手を取り合つて、この空前の災害の中から再起復興して、日本一美しい町、暮しゆたかな宇治市の建設をいたそうではありませんか。切に、市民の皆さんの御健勝と御努力を期待してやみません。



発行所
宇治市役所
編集兼発行人
京都府宇治市宇治砂一六〇
服部安太郎
電話 宇治 四四〇番
毎月一日発行 一部三円
宇治市宇治砂
印刷所 新進堂



一流木の整理もクレーンで



一統々運びこまれる救援品一

宇治市水害特報

第二集



一水禍の根元決壊口の築堤作業一



一観光道路の復旧を急ぐ一

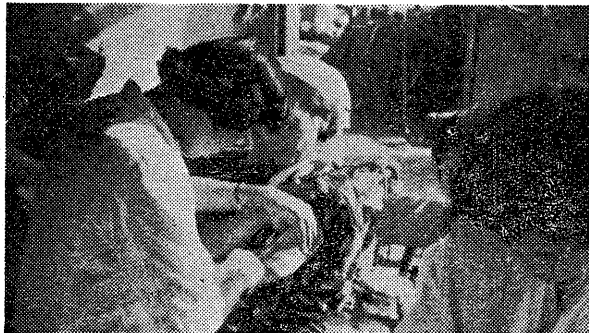
恐ろしいつた



—大久保校で減水を待つ—



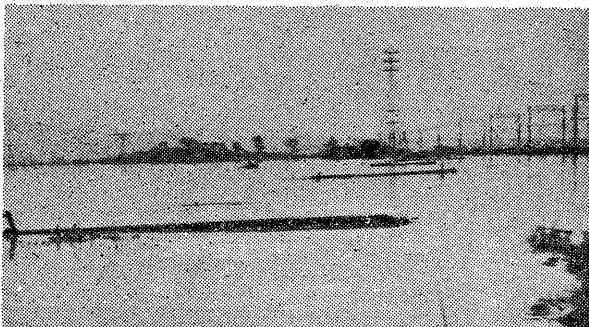
—安全な堤防で避難—



—喜ばれる医療班の忙しさ—

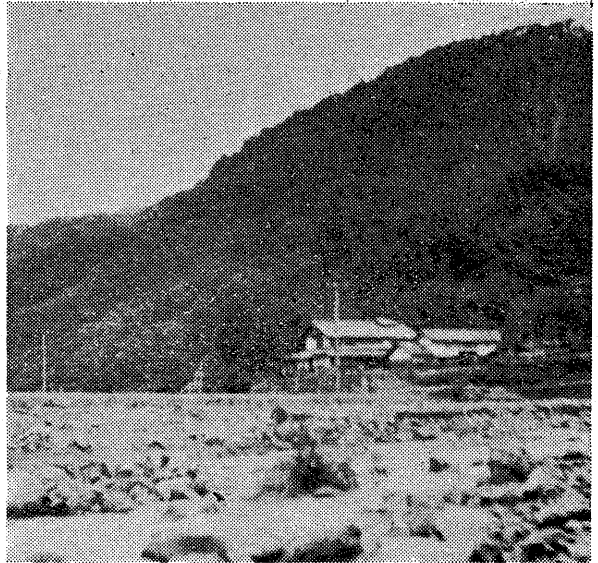


—田舎の中に流木の山—



—小倉春日森をのぞむ—

復興はばむ石と水



—笠取川(一部)の川幅は十倍にも—



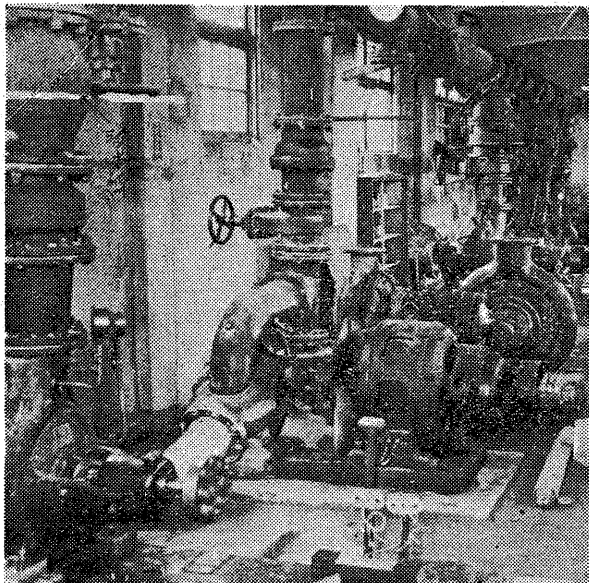
—炭山川のはんらん—



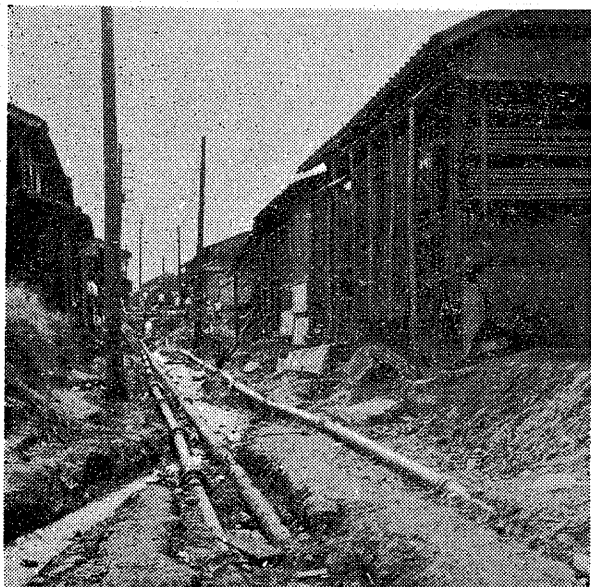
—今だに太古の巨椛池！(十月八日)—

寒さはかけあしてくる

市施設の被害も大きい



— 揚水ポンプ室（白線まで浸水） —



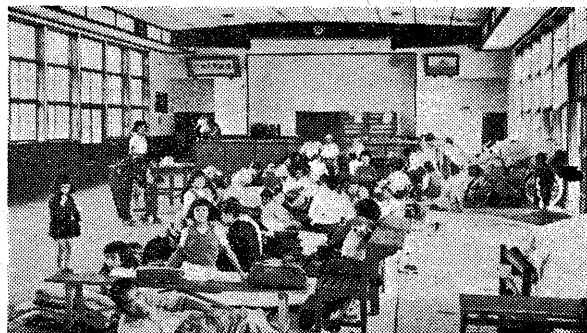
— 木幡道の水道被災状況 —



— 障子を張りかえて旅館街も復興 —



— いち早く家畜も避難 —



— 宇治中でかり寝の夢 —



— 水浸しの我家へ舟をつけて（三軒家） —



— みだじろ川のはんらんあと —



— 粒の米も実れと泥田に立つ老農婦 —

水
害
の
数
々

罹災者にあたたかい愛の手を！
災害救援金品の受付開始

三時の話題

宇治市観光美の隣とも鼻ともいわれている
浮島十三層塔と水害について

附 興聖寺の茶亭の問題

好川海堂

時と人の名を全く忘れて了つたが、大分以前、某書を見ると宇治川の中の島に堂々と空高く建つてゐる彼十三層塔は宇治市観光美の隣と書かれていたが、昔流に小むつかしくいへば画龍点睛、いわば観光美の焦点だとの感じを、一言のもとに人間の身体でいへば前腹壁の中心線に位置する全く鼻の感があると思つて直にいつたもので、當時は頗る感心したが、再應深く静かに考えると、どうも日本人には西洋の裸体画的表現はびつたりせず、美的観にも満足を与へないうらみがある。わたしはその向うを張つて異議を主張するわけではないが、むしろ男女容貌の美醜に大きな関係のある顔の中央にある鼻という方が適切だと思ふ。

の類でなく、況や黒人やオーストリア人によく見られる「廣鼻」類の醜いものでないことは今更説明の要もなからう。あの十三層形の塔は府下其他にも相当数あるが、たしかに高さに於ても、美しさに於ても、第一流品である事は間違いないと思ふ。かりに、現に今ある松の木ばかりで十三層塔がなかつたなら、恰もあんなか無いか分らないような鼻筋の通らぬ平つべたい鼻の顔の男女を見るが如く、又は宇治市という、大きな観光都市のお座敷の床の間に肝腎の掛物が掛つていないような物足らぬ感と、何の特色美もない、至る所で見られる極めて平凡な風景美となるであらうと云ふも決して過言でないと思う。



この宇治市観光美の一大焦点となつて、輝かしい光彩を放つてゐる十三層塔は、今更私などが申す迄もなく、今から七八百年前の昔し、所は大和四天王寺の御尊(へいそん)という当時、く世に知られてゐた一大高僧が、宇治橋の再興のために水難や水災のないようにと祈禱的に弘安年中に建設したもので、卒直に明ら様にいへば、そんな十三層塔を建て、いかにエライ高僧がゴマをたいてお経を読んでも、或は又、宇治橋には橋姫神云々の傳説もある。要するに神様の力を借りて水災を未然に防ごうとしたので、

は塔にも影りつけてある。その立派に今日に傳わる先人の努力、興隆變遷を以下簡単に書いて先人の努力苦心を再認識して感謝すべきは、あくまで感謝して将来安全に確実に保持しようではありませんか。唯ここでも一つ大に注意尊重すべきことは、敬尊のやつた祈禱的な意味の水災予防安全の事は全く昔の一場の夢と、科学の発達した今日の社会では消え去つてしました。然し敬尊の世を救い人を救つたものとして、高い聖なる宗教上の目的のもとに建設された、十三層塔は藝術的に新な生命を立派に数百年後今日にも生き長らえて、宇治市の観光美にとつてはなくてはならぬ最重要品となり、進んで国家の一文化財となつてゐることを何人も忘れてはなりません。

弘安年中建立されてから、今から六百年近く前の延文十一年に、地震が洪水かは確実に分りかねますが兎に角たをれ、くだけたのを法華滅罪寺の道秀(どうしゅう)といふ比丘尼の努力発願で再興された。次で慶長元年今から二百五十年前地震で又たをれくすれたのを淀城主永井尚政が修理した。その百余年後又々宝暦六年九月の大洪水で、この洪水は可なりひどかつと見えて、同じく永井尚政が建設した今の曹洞宗興聖寺側の岸にあつた茶亭も流失した位で余程ひどかつたようだ。茶亭のことは宇治から次号で詳細紹介するが、今こ

で十三層塔はすっかり倒れ、くすれて土砂中に長く埋没離散してゐたのを、明治四十一年大阪の福田会が必死の努力苦心で、発掘再興され現在昭和の今日に傳へたもので、今度の水災で島は半分ばかり塔ギリギリに流失したそうだが、塔には大した怪我もなくまずまず無事であつたことはまことに同慶の至りにたえません。いづれ補修されるでしょうから、一応参考のために、敬尊の創建当時の島の大まかき他の状態の事を簡単に書きますと、島の長さ四十七間、幅七間は五十四尊のマンガラを表はした十三層は十三大会を、高さの五丈は五智如来など、其外密教のそれぞれの教義や儀軌を表現してゐますが、今日では余ほど保守的な分らず屋の頑固坊主なら、或は色々と形式的な教義にとらはれた事を主張するかも知れないが、然しそんな事は一応参考のために聞いても好いが、結構、そんな事には一切頓着せず、充分万事を科学的合理的に考へて水災水難に能く耐え得るよう最安全を期して修築を考へることが、却つて創建者敬尊上人の宗教的精神を尊重する事になると、私は確信して疑いませ(特別寄稿)

家屋水害最終数字

去る十六日発表された市内住家の水害最終数字は次の通りである
全壊八九(四一人) 流失一一(五一一人) 半壊四〇八(一九五一人)
浸水 床上三四二(一六七九人) 床下六九三(三四〇四人)

鼻といへば人類学者や生理学者によつて色々様々に分類されてゐるが、今暫く簡単な人種学上の區別を拜借すると、あの十三層塔の美観は実にすつきりと鼻筋の通つたヨーロッパ人の「ますぐ鼻」に属する氣高い鼻で、同じヨーロッパ人に能く見られる「ながだか鼻」即ち「うねり鼻」「わし鼻」など